

■ ドル/円は大きく値を戻すも、依然チャンネル内の動きは続く…

既知のとおり、今週9日の米株市場の取引開始前に伝わった新型コロナウイルス向けワクチンに関連するニュースで目下の国際金融市場は全体に活況を呈している。

米大統領選でバイデン氏が勝利を宣言したことや、米上院議員選は共和党が優勢と見る向きが多いことなども含め、米・日をはじめとする世界の金融市場は複数の材料をすべて“いいところ取り”することで、次々にリスク資金を呼び込んでいる。

当然、全体のムードはリスク選好的となっており、基本的には円売りになびきやすい地合いであると言える。また、米国債から資金が流出していることに伴って米10年債利回りが0.9%台後半の水準まで上昇してきていることは、少なくともドル売りより円売りの方が勝る状況を醸し出すことに貢献していると見ることができ、結果、ドル/円は105円台半ばの水準まで値を戻す動きとなっている。

ただ、下図に見るとおり足下のドル/円が89日移動平均線と一目均衡表の日足「雲」上限の



水準、そして7月半ばあたりから形成している下降チャネルの上辺などといった複数の重要な節目に上値をガッチリと押さえられる格好となっていることも事実。

加えて、いまだ日足の運行線が日々線を上抜けられずにいることも見逃せないポイントと言え、やはり前述した複数の節目

近辺では一旦ショートを振るスタンスで臨みたいと個人的には考える。

「必ずしもドルの独歩高ではない」ということは、足下のドルに対して中国人民元やポンドが強含みで推移していることから明らかである。

ドル/人民元は、先週4日に一旦6.75元あたりまで急反発したものの、ほどなく再度下落して9日には一時6.6元を割り込む水準までドル安が進んだ。米大統領選でバイデン氏が勝利をほぼ確実にしたという前提で考えると、トランプ氏に比べればバイデン氏の方が米中間の緊張は緩和に向かいやすいとの期待もあり、半導体関連を中心に中国株が強含みの展開となっていることが背景にはあるものと思われる。

一方、ポンドについては「英政府がワクチン提供で米ファイザー社と9000万回分購入する合意書に署名している」という事実が強気材料視されているとも伝わる。「英国では12月からワクチン供給が開始される」との報道も一部にあり、真偽のほどは明らかでないものの、差し当たり市場で好感されていることだけは間違いのないようである。

とまれ、対ドルでの人民元やポンドの上値には自ずと限界もあるものと考えていいのではないかと。ポンド/ドルについては、やはり1.34-1.35ドル処の上抵抵抗がかなり強いと見られ、当面は戻り売りの機会をうかがいたい。

ユーロ/ドルに関しては、やはり1.19ドル処の壁が依然として厚く感じられる。振り返ると、ユーロ/ドルは1.175ドル処が重要な節目になっており、同水準を下抜ければ一旦は売り、同水準のサポートが強く感じられたら一旦は買いと考えたい。